



episode 23 私と祖母の手をつなぎ続けてくれる絵本

投稿者 大友 崇さま(宮城県)

『ハルばあちゃんの手』。この本を手にとったのは、絵本好きの知人に勧められたからです。手塩にかける。手間暇をかける。手入れをする。あるいは、手作り〇〇という表現。丁寧に心を込めて何かをする際に、「手」という表現が用いられます。ハルおばあちゃんが主人公の、この物語の主役は、彼女の「手」です。彼女が一途一心に生きてきた生涯、喜びも悲しみも経験してきた「手」とともに振り返ります。人柄はその背中に表れるとも言われますが、「手」にはその人の人生が刻み込まれます。



『ハルばあちゃんの手』
山中恒文 木下晋 絵
福音館書店 2005年

この絵本は、私の祖母の「手」の事を思い出させてくれます。幼い頃、母に連れられ、よく祖母に会いに行きました。祖母にとっては、私は初孫で、私の事をとても可愛がってくれました。長じて後、社会人になってからも、初めての給料でプレゼントを贈ったり、祖母の誕生日、敬老の日には私なりの気持ちの品を贈っていました。その度に祖母は、「難儀して稼いだお金なのに…。ありがたいねえ。ばあちゃん、たかちゃんに恩返ししないといけないねえ」と喜んでくれました。

この絵本を初めて読んだ時、祖母は入院していました。退院の見込みなき入院でした…。私は仕事の合間を縫って、よく祖母に会いに行きました。別れ際には、いつも「また来るね」と手を振って病室を後にしました。ある日の事、普段は手を振って別れるのに、その日は祖母の手を握手するかのよう握ったことがありました。そして、その手の感触に、はっとさせられました。私の手を握り返す祖母の手の力強さに、そして名状しがたい温かさ、そのぬくもりに。同時に、祖母の八十有余年の人生の重みと深さを感じました。嗚呼、これが一生懸命に生きてきた祖母の「手」なんだなあ、と…。

祖母が亡くなって6年経ちました。今でも、あの時握った祖母の手のぬくもりが掌に残っている気がします。この絵本は、この先の人生において、私の手と祖母の手を繋ぎ続けてくれるよすがとなる絵本であり続けるでしょう。

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2022」投稿作品より



本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



鉛筆画が語る、ひとりの女性の一代記

縦29cm横30cmもある大型絵本の白い表紙に描かれているのは、大小2つの手と赤い玉だけで、たっぷりある余白がそれらを際立たせています。

この2つの手の持ち主が、異なる年代の人であることは、一目瞭然です。右側には、むちっとした小さな赤ちゃんの手がひとつ、そして、左上から差し伸べられているのは、赤ちゃんの手を今にも握りそうな、しわが露わな骨ばった手です。

2つの手と、その間に書かれた『ハルばあちゃんの手』という題字の視覚情報だけで、読者は左側が「ハルばあちゃんの手」であることを認識するでしょう。でも、骨ばった手だけが「ハルばあちゃんの手」ではありません。小さな手もまた、赤ちゃんの頃の「ハルばあちゃんの手」なのです。

本作は、一人の女性の一生を描いた大河ドラマ仕立ての絵本です。わずか38ページに、人が生まれて、成長していき、結婚そして子育ての波を経て、やがて老いるまでの生涯が映像で流れているのです。とりわけ、目を奪われるのは、モノトーンの鉛筆画のデッサンです。

「鉛筆画の鬼才」と呼ばれる木下晋氏が、10Hから10Bまで22段階の鉛筆の濃淡を使い分けて、主人公の誕生から老年期に至るまで、その手を中心に描写した画集でもあるのです。

「死を見つめながら生きる人」を描く

木下晋氏は、「最後の瞽女^{こぜ}」と呼ばれた盲目の小林ハル氏や、元ハンセン病患者の詩人・桜井哲夫氏を半生にわたって鉛筆画で刻んできた画家です。「絵を描くことは、その人の人生に向き合うこと」と話す木下氏の願いと祈りは、自伝『いのちを刻む』で語られています。

鉛筆による「モノトーンのデッサンでも色を感じさせることができる」と知ったのは、全盲の小林ハル氏を描き続け20年経った頃でした。「肖像画を描きたいのではない」、描いてきたのは一貫して「死を見つめながら生

きる人」の姿と述べる木下氏に、画家の神髄を見せつけられるのです。「死を見つめながら生きる」モデルと向き合い、対話し、そしてその人生の深淵を凝視して刻まれたデッサンには、いのちがほとぼしっているのです。

能登半島の漁師夫妻を刻む

『ハルばあちゃんの手』は、児童文学作家・山中恒氏が創作した物語です。山中氏によるテキストを渡された木下氏は、その制作スタンスから、単に創造物を描くことはしませんでした。

「時代に翻弄されながらも、幸福な人生を全うする」主人公ハルさんの、モデル探しの旅に出るのです。そして、行き着いた能登半島で、激動の時代を寄り添ってきた漁師の老夫妻と出会います。美しい笑顔が、絵本のイメージにピッタリ重なり、本作のモデルになってもらうのでした。

63年連れ添った87歳と81歳の夫妻が、「死ぬときまでふたりで生きる」ことが望みと交わす微笑みは、木下氏が追い続ける「死を見つめながら生きる人」そのものだったというわけです。

専門領域を超えたプロが集結すると

本作は、画家・木下晋氏の初めての絵本です。木下氏を絵本の道に導いたのも、福音館書店の敏腕編集者である松居直氏でした。当時、既に福音館書店社長を退いていた松居氏に、社会の核家族化・高齢化問題を断言されて口説かれ、引っ込むわけにはいかなかったと言います。

山中氏もまた、絵本のテキストは初めてで、最初に参考にしたのは木下氏の画文集『生の深い淵から』（里文出版）でした。こうして、それぞれの道のプロが集結して生まれた芸術作品『ハルばあちゃんの手』は、社会へ問題提起する一冊ともなったのです。

文献

- 1) 木下 晋：いのちを刻む－鉛筆画の鬼才、木下晋自伝、藤原書店、東京、pp.222-228、2019.
- 2) 五十嵐憲子：作品を読む『ハルばあちゃんの手』、子どもと読書(362)、pp.36-38、2007.